

ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について（ ）

神 谷 栄 司

〔抄 録〕

小論はヴィゴツキーの「文化 - 歴史理論」と30年代のヴィゴツキー理論における新しいものとの関係をどう捉えるべきかについて論じることを通して、ヴィゴツキー理論の発展の時期区分を仮説的に提起している。小論における主たる論証は次のものである。30年代ヴィゴツキー理論から見ると、「文化 - 歴史理論」は個別的心理機能の記号等による媒介的発達を解明したとはいえ、まだ子ども・人間の全体的な発達を捉えていなかった。30年代におけるヴィゴツキーの新しさは心理諸機能の関係を機軸にした意識の構造化による人格発達論と、心身過程そのものを捉える「心理学的」認識の発展である。「文化 - 歴史理論」の水準にある著作「高次心理機能の発達史」と「年齢の問題」とを比較すると、「文化 - 歴史理論」と人格発達論は《断絶と延長》において捉えられる。また未完の手稿「情動にかんする学説」の視点を踏まえれば、ヴィゴツキーの規定した自然的発達と文化的発達の相互関係にかんする見解はソ連時代の批判にもかかわらず、今なお有効である。

キーワード ヴィゴツキー理論，文化 - 歴史理論，発達，人格，心身問題

ヴィゴツキーの著作の広範な出版は大多数のヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国と日本で行われている。

ギタ・ヴィゴツカヤ

身体が何をなしうるかをこれまでまだ誰も規定しなかった。
スピノザ

問題の所在 30年代ヴィゴツキー理論の視点

1. あらゆる理論はその全体像において、歴史的に捉えられねばならない。その場合に、その理論が発展してきた時期区分をどう定めるのかは、研究の最初と最後に現れざるをえない重要だが複雑な課題である。ヴィゴツキー理論の場合にも、それはそれほど単純な事柄ではない。

ヴィゴツキー（ ， ， 1896-1934 ）の心理学理論は「文化 - 歴史理論」と呼ばれることが多い。たとえば、中村和夫はその著書『ヴィゴツキーの発達論』のサブ・タイトル

を「文化 - 歴史的理論の形成と展開」とし、「なぜ、それは文化 - 歴史的理論と呼ばれるのであろうか」という問いへの探求を上記の著書の課題とさえしている(中村和夫, 1998)。だが、こうした一般的な特徴づけとは対立する、A・A・レオンチェフの規定がある。彼は「ヴィゴツキーと文化 - 歴史学派は同じものである」という定義を「神話」と呼んで、次のように述べるのである。

もちろん 1930 年にとどまるならば、ヴィゴツキーを文化 - 歴史心理学と同一視することは容易である。だが、1930 年にとどまったとしても、私が示そうとしたように、そういうことにはなりそうにもない。なぜならば、すでに 1929 年に、ヴィゴツキーは新しいアプローチについて深く考え始めていたからである。ヴィゴツキーは文化 - 歴史的アプローチを創造したが、彼こそそれを克服した最初の人であった。(, . . . , 1990 , . . . 137 // 2003 , p.283)

A・A・レオンチェフがここで挙げている 1929 年とは、その年に書かれたヴィゴツキーの手稿「人間の具体的心理学」(, . . . , 1929 / 2003) を指しており、この手稿を起点にして活動論と人格論が新しいアプローチとして展開されるというのがレオンチェフの主張である。

筆者が興味を惹かれるのは、中村もまたこの手稿を分析し、それを「文化 - 歴史理論」の文脈で捉えようとしており、それに対して A・A・レオンチェフは「文化 - 歴史理論」の「克服」を見いだしていることである。つまり、ヴィゴツキー理論の発展において、「文化 - 歴史理論」はある時期の特徴であるとすれば、次の時期はその否定として現れるのか、それともこの理論は一貫した深化として現れるのかという問題、言いかえれば、1930 年代のヴィゴツキー理論は「文化 - 歴史理論」との断絶において捉えられるのか、それとも延長において捉えられるのかという根本的問題に、ここでいきなり遭遇するのである。

問題をさらに複雑にすることになるが、M・G・ヤロシェフスキーや S・M・モロゾフはヴィゴツキー理論を「文化 - 歴史理論」と呼ぶことそのものに疑問を投げかけている。

0

ついでに指摘しておくが、ヴィゴツキーが創造したものは「思考の文化 - 歴史理論」ではなく、個体発生における行動の独特な調整者としての高次心理諸機能の形成理論である。(, . . . , 1984 , . . . 334)

「L・S・ヴィゴツキーの文化 - 歴史理論」という用語は年とともに安定的性格を獲得した。しかしながら、現代心理学の別の文化心理学的アプローチとヴィゴツキー理論とのあいだに用語的に境界を設けさせる一連の論拠がある。ヴィゴツキーの理論(と方法論)は、われわれの見解では、彼以前(および以後)になされたものと本質的に異なっている。1926 ~ 28 年にヴィゴツキーと彼の同調者たちによって実行された研究プログラムはしばしば、ヴィゴツキーと彼の学派の主要な業績と捉えられている。それと同時に、現代のロシア心理学では、なによりも A・G・アスモロフと V・P・ジンチェンコの努力によって、文化 - 歴史心理学が形成されているが、それは無条件に、ヴィゴツキーの表明した観念を基礎としながらも、彼の創造した理論構築の境界から内容的には遥かに抜け出している。そのほか、現代心理学(ヨーロッパと北アメリカの)には文化 - 歴史学派が存在しているが、その若干の命題はヴィゴツキーの原理的観念と異なっている。したがって、この論文では「文化 - 歴史理論」の概念はそれが何十年か前にそうであったほどには明瞭ではないと考え、「L・S・ヴィゴツキーの心理学的システム」の用語を使用することにする。(, . . . , . . . 6-7)

こうなると、「文化 - 歴史理論」の用語そのものが問題となり、後に筆者自身の作業仮説により用語の問題をとりあげることにもなるが、小論ではとりあえず、ヴィゴツキーの理論の全体を表すときにはヴィゴツキー理論と表記し、「子どもの文化的発達の問題」(, , 1928 / 2003), 「心理学における道具的方法」(, , 1930 / 1982 // 1987), 「子どもの発達における道具と記号」(, , 1930 / 1984 // 2002), 「行動の歴史にかんする試論」(, , 1930 / 1993 // 1987), 「高次心理機能の発達史」(, , 1931 / 1983 // 1972), 「思考と言語」(, , 1934 / 1982 // 1962 , 2001) などにおいて論じられた、心理的道具による心理機能の媒介的発達にかんする理論を「文化 - 歴史理論」と括弧をつけて表記しておきたい。

2. 38 歳を迎える前に夭逝したヴィゴツキーにとって、その理論はたえず上昇局面にあった。彼の理論展開の最後の時期は、なるほど未完ではあるが、それでも最後の段階における模索はそれに至る諸段階を分析する鍵である。「文化 - 歴史理論」も 30 年代ヴィゴツキー理論の視点から捉えることによってこそ、その真の姿が現れてくる。そうした考察のために、まず、ヴィゴツキーと同時代を共有した A・N・レオンチェフ (, , 1982) と D・B・エリコニン (, , 1983 / 1989) が 30 年代ヴィゴツキー理論をどう捉えたのかを検討し、しかる後に、筆者が部分的ではあるが、この問題について考察した作業仮説 (神谷栄司, 2004a, 2004b, 2004c) を再吟味しておきたい。

A・N・レオンチェフによれば、ヴィゴツキーは心理諸過程の媒介的発達を解明したあと、「文化 - 歴史理論がその準備段階であった、出発点となる基幹的な問題 意識の問題に戻った」(, , 1982 , . 37) とされる。この仕事は彼の死の故に完成しえなかったが、意識の問題へのヴィゴツキーのアプローチを理解するうえで、「思考と言語」(最終章), 「高次心理機能の発達と崩壊の問題」, 「子どもの心理発達における遊びとその役割」, 未完の手稿「情動にかんする学説」, 「心理学と心理機能の局在化にかんする学説」という 1933 ~ 34 年の著作・手稿や報告・講義録、さらには、それよりも早い時期の手稿「高次心理機能の発達史」(1931 年) と報告「心理学的システムについて」(1930 年) が重要であるという (同上)。最後に挙げられた報告にかんするレオンチェフの吟味には、すこぶる興味深いものがある。

ヴィゴツキーによる内化過程の理解には、1930 年代の始めまでに深い転換が起きていた。彼自身、これについて次のように語ったのである 「発達の過程で……変化するのは、私たちが以前に研究したような（これは誤りであった）諸機能や、諸機能の構造……であるよりは、むしろ諸機能の相互の関係、連関が変化し変形するのであり、以前の段階では明らかでなかった新しいグルーピングが生じるのである」(, , 1930 / 1982 . 110)。ここでヴィゴツキーは、問題のこうした 2 つの aspekto の相違に聴衆の注意を鋭く喚起しようとして、自分に対しては不公平であった。媒介の影響のもとで個別機能の構造がどのように変化するかという研究のこうした「誤り」から始めることなしには、発達過程における諸機能相互の連関の変化にかんする新しい結論にたどり着くことはできなかったであろう。(, , 1982 , . 37-38)

ここで言われている内化の理解の変化とは、「心理間機能から心理内機能へ」という「高次心理機能の発達史」における定式から変化したのか、この定式に変化したのかは、レオンチェフの述べたことから筆者には不明である。だが、きわめて確かなことは、「文化 - 歴史理論」は個別的な心理機能の媒介的発達を研究したものの、心理諸機能間の連関の発達を問題にしていなかったことである。(後に述べることになるが、筆者はこの点に、「高次精神機能の発達史」における発達論と「年齢の問題」(, . . . , 1932-34 / 1984 // 2002)における発達論の基本的な相違を見いだす)。レオンチェフはこれを機軸にしながら、心理機能の局在化や活動理論を位置づけようとするのである。

エリコニン(1931 ~ 34 年)におけるヴィゴツキー理論の展開を 3 つの方向にまとめている(, . . . , 1983 / 1989)。第 1 は「意識の構造と発達」にかかわる研究、とくに感情と知能の相互関係にかんする研究であり、それに該当するものとして「思考と言語」第 7 章(最終章)と「知的遅滞の問題」(, . . . , 1935 / 1983 // 1982)が挙げられている。第 2 は教授・学習と発達の問題であり、第 3 は児童(年齢)心理学の問題である。第 1 の方向は、A・N・レオンチェフの指摘と重なる部分であるが、エリコニンの方はとくに感情と知能の関係を重視している。この点にかんして、エリコニンは次のようにヴィゴツキーを引用するのである。

私たちはすでに一度ならず、感情過程と知的過程は統一体であることについて述べてきたが、だがそれは不動で恒常的な統一体ではない。それは変化するのである。子どものあらゆる心理学的発達にとってもっとも本質的であるのは、感情と知能とのあいだの諸関係の変化である。(, . . . , 1935 / 1983 , . . . 255 // 1982 , p.166)

最後に、私たちに残されているのは、言語的思考の内的平面の分析において最後の決定的な一歩を踏み出すことである。思惟はまだこの過程における最終審ではない。思惟そのものは他の思惟から生まれるのではなく、私たちの欲望と欲求、私たちの興味と意欲、私たちの感情と情動を包含する動機の領域から生まれるのである。思惟の背後には感情的・意志的傾向が控えている。この傾向こそ、思考の分析における最後の「なぜ」に答えることができる。(, . . . , 1934 / 1982 , . . . 357 // 1962 , 2001 , p.427)

このように、心理諸機能のあいだの連関、とりわけ思考と感情のあいだの関連、思惟の背後にある感情的・意志的傾向こそ思考の分析を完成させるものであるとヴィゴツキーは述べているが、エリコニンはそれに着目するのである。ところが、1931 ~ 33 年にかけてヴィゴツキーが書き続けた未完の手稿「情動にかんする学説」は、情動の自然科学的および哲学的研究であり、ヴィゴツキーの情動論、感情と知性の関連について把握しうる貴重な文献であるが、エリコニンにはこの手稿の分析が欠けている。この手稿の公刊は 1984 年であるので、83 年に発表されたエリコニンの論文にそれを求めるのは無理なことであったかも知れない。ただし、エリコニンはこの手稿の存在は挙げている。A・N・レオンチェフの論文(82 年)の場合も同様である。

エリコニンがこの未完の手稿に言及するのは、「芸術心理学」(1925 年)の分析と関連して述べられた次の箇所だけである。

人間の感情生活の問題への関心はその後の著作においてもヴィゴツキーをとらえていたと考えることには、十分な根拠がある。次の点を指摘するのは興味深いことである。すなわち、感情の本性や感情と知性の相互関係に対するスピノザの見解はヴィゴツキーを大いに興奮させていた。彼は晩年に、スピノザの提起した哲学的平面で、情動心理学を批判的に考察した専門的な著作を著した。そのなかで、ヴィゴツキーはデカルトとスピノザの情念にかんする学説を検討し、それと関連して、自分と同時代の、説明心理学と記述心理学における人間的情動の本性への見解を分析した。その研究は未完に終わったが、L・S・ヴィゴツキーのアーカイヴで発見されたものが彼の著作集の最後の巻で公表された。（
., 1983 / 1989, . 415）

このように、「情動にかんする学説」は、エリコニンの場合、ヴィゴツキーの晩年の理論展開のなかに位置づけられているのではなく、「人間の情動生活の問題への関心」としてだけ捉えられており、ヴィゴツキー理論にとってこの手稿の持つ意義については分析されていない（なお引用の最後の箇所は 1989 年にエリコニンの著作集が編集・出版された際に付け加えられたものであろう）。ここでエリコニンがとりあげている手稿の内容は、そのときまでに公表されていた手稿の第 17 章のみであらう。A・N・レオンチェフの場合は、この手稿は 30 年代のヴィゴツキー理論の展開のなかに位置づけられてはいるが、文字通り、書名を挙げているにとどまっている。

3. 筆者の作業仮説によれば、ヴィゴツキー理論の発展において「情動にかんする学説」は「心理学の危機の歴史的意味」（
., 1927 / 1982 // 1987）に匹敵し、あるいは、その続編とも言うべきものであり、後者の危機論がヴィゴツキー理論の飛躍を準備したのと同じように、前者の情動論は「人間の心理学」を準備するはずであった。「情動にかんする学説」は、知能との連関のもとにある情動の発達理論を提起するとともに、同時代の心理学の危機の淵源をデカルトの「情念論」に求め、デカルトに対置されるスピノザから摂取した心身の統一性、心身一元論に立った情動理論、さらには情動の問題にとどまらずに「人間の心理学」を構想しようとしていた。

心身問題は、「心理学の危機の歴史的意味」でも萌芽的に扱われている。この著作の第 16 章（最終章）で、ヴィゴツキーは自分が構築しようとする心理学をどのように呼ぶべきかと問い、「客観的心理学」「行動の心理学」「マルクス主義心理学」「科学的心理学」等々ではなく、たんに「心理学」とすべきことを述べている。その前段で、マルクス主義と心理学をめぐる考察のなかに、心身問題が次のように言及されている。

.....ブレハーノフにも、他のマルクス主義者たちにも、.....心理学の完成された方法論のみならず、その萌芽さえ存在していない。彼らの前にはこの問題は立ち現れなかったし、このテーマへの彼らの言説は何よりも非心理学的性格をおびている。心理的なものの認識方法にかんする認識論的ドクトリンさえ、彼らには存在していない。心身の相互関係にかんする仮説であっても、それを創造するのは簡単なことかも知れないのに！ブレハーノフ自身が何らかの心身的ドクトリンを創造したならば、彼はスピノザと並んで自分の名前を哲学史に書き加えたであらう。（
., 1927 / 1982, . 397 // 1987, p.230）

私たちはここに心身問題を意識したヴィゴツキー理論の始原を見いだす (1925 年の「芸術心理学」のエピグラフにもこの問題への言及はあるが、文字通り、言及にとどまっている)。だが、心身問題を踏まえた心理学理論の暗示は、より本格的には、心理学の危機を意識しながら執筆された「心理・意識・無意識」(, . . . , 1930b / 1982) に認められるであろう。

弁証法的心理学は何よりも心理過程と生理学的過程の統一から出発する。弁証法的心理学にとって、心理は、スピノザの表現によれば、自然の彼岸にある何ものか、あるいは国家のなかの国家ではなく、自然そのものの一部なのであり、私たちの大脳の高次有機物質の諸機能と直接に結びついている。(, . . . , 1930b / 1982 , . . . 137)

このようにスピノザにも依拠しながら、ヴィゴツキーの構想する心理学 (ここでは弁証法的心理学) は、心身の統一性を出発点とすることが宣言されている。この統一性は、心理過程を生理学的神経過程に還元する心身の同一性 (18 世紀のフランス唯物論) でも、感覚とその対象たる客体を同一視し、客観的なものから主観的なものを区別できなくなる同一性 (マッハ主義) でもない。それらの同一性とは違って、ヴィゴツキーは心身の統一性から出発するのであるが、注目すべきことには、そうした統一性の視点から心理過程をとらえるために、「心理過程」と「心理学的過程」という用語の区別さえ提起している。

弁証法的心理学は、どちらの〔生理学的還元論とマッハ主義の〕同一化も拒否するのであり、心理過程と生理学的過程を混同することなく、心理の還元されえない質的な独自性を承認して、心理学的過程は統一的であることをもっぱら主張する。私たちはこうして、人間の高次の行動形態を表す独自の心理生理学的・統一的過程を承認することになるが、この過程のことを、生理学的過程と呼ばれることとのアナロジーで、心理過程とは違って、心理学的過程と呼ぶように提案したい。(, . . . , 1930b / 1982 , . . . 138)

心身過程をこのように、「生理学的過程」のアナロジーで「心理学的過程」と呼ぶことには、スピノザの次のような規定 「精神と身体は同一物であってそれが時には思惟の属性のもとで、時には延長の属性のもとで考えられるまでなのである」(スピノザ、『エチカ』第 3 部定理 2 備考) を想起させるものがある。心身過程は「延長」(物質) の属性から見れば「生理学的過程」であり、「思惟」(精神) の属性から見れば「心理学的過程」なのである。だがここで重要なことは、ヴィゴツキーがその心理学的構想を心身問題にまで拡大して捉えようとしたことである。そうであるなら、私たちは、なぜ彼が「情動にかんする学説」であれほどまでに詳細にジェームズ・ランゲ説の生理学的・病理学的批判を行ったのかを、理解することができる。ヴィゴツキーが心身問題をも含んで心理学理論を展開しようとしたのは、「心理学の危機」に対する彼の認識からすれば、ある意味では必然である。心理を行動から「蒸発」させて行動を研究する行動主義的傾向、精神を他の諸関係から切り離し、孤立的に心理を研究する精神主義的傾向をともに批判し、より全体的な視野に立つ新しい心理学を構築しようとしたヴィゴツキーが、心理機能の発

達を心理諸機能間の関係の発達のなかで捉えることと同時に、心理を身体から切り離さずに心身過程を「心理学的過程」として捉えることへと突き進んだことは、まったく合理的である。

筆者はヴィゴツキーの「情動にかんする学説」に注目して、この未完の手稿が新しい心理学「人間の心理学」を彼が構築しようとした跳躍台となりうるものであるという仮説を次のように述べたことがある。

彼が「情動にかんする学説」をもとに今後の心理学として構想したのは心身一元論にたった「人間の心理学」であり、これを核にした彼自身の心理学の再構築であろう。「心理学の危機の歴史的意味」は「子どもの文化的発達の問題」から「高次心理機能の発達史」へ、さらに「思考と言語」へと結実したと捉えることができるが、ヴィゴツキーが晩年に長い時間をかけて書き綴った「情動にかんする学説」は、彼がそれまでに構築した理論にひとつの章を付け足したものであるよりは、それは、もし彼があと数年生きていれば、彼の理論のすべてを体系化しようとする「人間の心理学」を産み出したであろうような性格のものであろう。（神谷栄司，2004a，p.19）

この仮説は「心理学の危機の歴史的意味」の位置づけの点や、「心理・意識・無意識」に言及していない点で不十分さを免れえないが、それでも「情動にかんする学説」が情動論にとどまらず新しい心理学の構築の模索でもあった点は、上記の仮説以後に筆者が眼にしたヤロシェフスキーの次のような言説と共鳴しあっていることは確かである。彼はこの手稿を考察して、次のように書いている。

The task of new psychology was to comprehend personality in terms that would capture the integral quality of man as a corporeal-spiritual being uniting in his flesh and blood the natural and the socio-cultural. （Yaroshevsky, Mikhail, 1989, p. 312-313）

ここでヤロシェフスキーが述べるように、ヴィゴツキーの構想しようとした「新しい心理学」つまり「人間の心理学」は「人格」を理解するうえで、「自己の血肉のなかに自然的なものと社会・文化的なものを統一する心身的存在」の「統合的な質」を明らかにしようとした。すなわち、レオンチェフやエリコニンが論じたような個別的心理機能から心理諸機能間の関係（人格）への進化をとげるヴィゴツキー理論は、それにとどまらず、心身問題というさらにいっそう広範な土台のうえで構築されようとしたのである。

こうして、筆者の再吟味された第1の作業仮説は次のようになる。

30年代ヴィゴツキー理論における新しいものは、第1に、A・N・レオンチェフ、エリコニン、A・A・レオンチェフが言うように、個別的心理機能そのものの発達ではなく、心理諸機能のあいだの関係（人格）の発達を捉える方向性の模索であり、第2に、心理諸機能を身体から切り離さずに心身過程を捉える「心理学的過程」の認識の模索である。

第1の模索は「人間の具体的心理学」（1929年）または「心理学的システム」（1930年）に始まり「思考と言語」（1934年）、「知的遅滞の問題」（1935年）に至る著作において行われ、第2の模

索は「心理・意識・無意識」(1930年)から「情動にかんする学説」(1931-33年)に至る著作において行われている。

このように人間の発達を、心理機能の分析から心理諸機能間の関係へ、さらに心身過程へといっそう全体的な過程として捉えるヴィゴツキーの理論展開は「心理学の危機」に対する認識から必然的に生じたものである。その理論展開は、「人間の心理学」と呼ばれるヴィゴツキー理論の新しい飛躍を準備するものであった。

4. 30年代のヴィゴツキー理論における新しいものを以上のように規定し、そうした視点から「文化 - 歴史理論」を位置づけるとすれば、この理論はどうなるであろうか。すなわち、30年代における新しいものは「文化 - 歴史理論」の「克服」であるのか、発展であるのか、断絶であるのか、延長であるのか、という先述した「文化 - 歴史理論」にとって根本的な問題が現れてくる。ここでは「高次心理機能の発達史」を30年代ヴィゴツキー理論の視点から捉えなおして、この問題を考察してみたい。

第1に、すでに触れた点であるが、「高次心理機能の発達史」における発達論と、「年齢の問題」とそれにもとづいて新生児期から学齢期にかけて論じられた発達論は、同じものであるとは言えない。前者の分析はやはり、注意・記憶・思考・概念形成などの個別的心理機能の記号・言語による媒介的発達、すなわち、随意的注意・論理的記憶・言語的思考への自然的な注意・記憶・思考の発達であった。それに対して「年齢の問題」における発達論は以下のように、心理機能間の関係を構造として捉えた人格発達論としての特徴をもっている。

(1) 年齢期 は「構造」として捉えられ、その構造の中心となる心理的「新形成物」は他の心理的諸形成物(副次的形成物)を規定し、副次的形成物の発達は単独でなされるのではなく、中心的形成物の発生・発達と関連して発達する。

(2) 発達の時期区分は、ひとつの指標ではなしえず、各時期に発生する中心的な心理的新形成物によって、つまり内容的には異なる指標によってなされる。

(3) 発達は、各年齢期の構造、とくに中心的な心理的新形成物と「発達の社会的状況 - 」との矛盾の解決として捉えられる。すなわち、新形成物が登場し、それを機軸に構造化された意識をもつ子どもによる、より正確には、そうした子どもに促された大人による「発達の社会的状況」の変更によって、この矛盾は解決される。

(4) 発達は相対的に安定して進行する年齢期と「革命的」に進行する「危機的年齢期 - 」とに区分され、それぞれ子どもの発達に質的变化をもたらす。「発達の社会的状況」の再編は危機的年齢期に典型的に現れる。

(5) 危機的年齢期はひとつの時期を構成するが、その開始と終了の時点ははっきりとは現れず、危機のクライマックスの時点のみが顕現する。それを標識にして、およそそれ以前の数か月とそれ以後の数か月を開始と終了の時点とする3つの相 によって構成される。危機的

時期の心理的新形成物は過渡的性格をおび、次の安定的年齢期になると、それ自体としては消滅するが、形を変えて潜在する。

（6）安定的年齢期は 2 つの段階に分けられ、心理的新形成物の萌芽は第 1 段階ではミクロな変化を蓄積し、第 2 段階になると、その年齢期の心理的新形成物として顕現してくる。この安定的年齢期の新形成物はそのままの形で保存され、危機を経て、次の年齢期では副次的形成物に転化していく。

以上の要約から明らかなように、「年齢の問題」でヴィゴツキーが提起したものは、個別的心理機能の発達論ではなく、心理諸機能間の関係を、中心的機能が副次的諸機能を規定する「構造」としてとらえ、しかも中心的機能は内容的に異なる新しい中心的機能と交代することによって構造そのものが発達するという発達論である。ある年齢期の構造とは、その年齢期における子どもの人格と同義であり、したがって、「年齢の問題」における発達論は人格発達論と特徴づけることができる。個別的心理機能の発達論と人格発達論のあいだには明らかに断絶がある。

しかし同時に、「高次心理機能の発達史」第 15 章（最終章）では、ヴィゴツキーには個別的心理機能の発達にとどまらず「子どもの全体的な文化的発達の構図ないし情景」(Vygotsky, 1931 / 1983, 314 // 1972) を明らかにしようとする意図が認められる。すなわち、第 6 ～ 11 章までの個別的機能の分析の部分（話しことば、書きことば、算数操作、注意、記憶、思考）、第 12 ～ 14 章の総合の部分（「自分自身の行動の支配」、「高次の形態の行動の教育」、「文化的年齢の問題」）を執筆したうえで、第 15 章では、新生児期から順次、全体的文化的発達を描こうとしている。だが、そのためには原理的検討が必要とされるのであり、ある意味では、それまでの章の論述の理論的不備を指摘するかのようになり、ヴィゴツキーは次のように述べるのである。

.....私たちの研究の進行は自然的発達の進行の研究と異なっている。自然的発達は、その結果として全体の総和的变化が形成されるような個別諸部分の発達・変化として実現されるのではない。むしろ逆に、すでに検討したどのひとつの機能も ことばや記憶であれ いくらかなりとも自立的に、他の諸機能に依存せずに発達するのではない。心理生活のあらゆる側面は、密接な影響の過程で、できる限り相互に前進させ支えあいながら、発達していく。人格は全体として発達するのであり、条件的にのみ、科学的分析のためにのみ、私たちは人格の発達のあれこれの側面を抽象することができる。.....こうして、有機体的発達〔自然的発達〕の領域でも、アリストテレスの表現によれば、全体はその諸部分よりも先にあり、その諸部分そのものとその作用、つまり、器官と機能は全体の変化に依存して変化する。これとまったく同じように、何らかの機能の文化的発達の領域におけるもっとも小さな一歩でも、そのきわめて萌芽的な形態であっても、人格の発達を前提とするのである。(Vygotsky, 1931 / 1983, 315-316 // 1972)

このように、ヴィゴツキーが「高次心理機能の発達史」の最後に辿り着いたのは人格発達の問題であり、その延長として「年齢の問題」が書かれたことは明らかである。後者には文化的発達の概念や叙述は登場しないとはいえ、この著作がいつそう精緻な発達論へと結実していく前段階に位置していたとすれば、やがて自然的発達と文化的発達の相互関係を人格発達の視点

で再構成されるであろうことは予想に難くない事柄であろう。

以上のような意味で、「文化 - 歴史理論」と 30 年代ヴィゴツキー理論は断絶か延長かではなく、《断絶とともに延長》において捉えられるのである。

第 2 に、心理間機能の心理内機能への転化という「高次心理機能の発達史」における発達の基本原理と「年齢の問題」における基本原理（「発達の社会的状況」 - 「中心的心理的新形成物」関係）とは、やはり同じものとは言えない。前者は次のように述べられている。

私たちは文化的発達の一般的・発生的法則を次のように定式化することができる。すなわち、子どもの文化的発達におけるあらゆる機能は二度、二つの平面において、舞台上現れる。最初は社会的平面において、その後心理学的平面において、最初は人たちのあいだで、心理間カテゴリーとして、後には子どもの内部で、心理内カテゴリーとして現れるのである。このことは随意的注意にも、論理的記憶にも、概念形成にも、意志の発達にも同じようにかかわっている。私たちはこの命題を法則と正しく見なしているわけだが、だがもちろん、外部から内部への移行は過程そのものを變形し、過程の構造と機能を変更する。あらゆる高次機能、それらの関係の背後には、発生的には社会的諸関係が控えている。(

， ， 1931 / 1983 ， ， 145 // 1972 ， p.212)

ヴィゴツキーがここで文化的発達の法則そして規定した心理間機能の心理内機能への内化は、言語を例にとれば、コミュニケーション言語が発生的には内言へと移行していくことを意味し、より一般的に言えば社会的なものが個人的なものに移行することを意味するが、ヴィゴツキーはこの内化理論を個別的心理機能に即して分析している。「過程の構造」とあるのは個別的機能の発達過程でその機能の構造の変化のことであり、諸機能のあいだの構造を指しているのではない。

それに対して、「年齢の問題」における「発達の社会的状況」と「新形成物」の関係には、「外部から内部への移行」を含みながらも、それには解消されないものがある。それを一般的に論述した部分を引用してみよう。

各年齢期に固有な発達の社会的状況は、子どもの生活様式全体、つまり彼の社会的存在様式を厳密に法則的に規定する。ここから……その年齢期の中心的新形成物の起源つまり発生にかんする問題が生じてくる。その年齢期の始まりまでに作りだされ、子どもと環境とのあいだの諸関係によって規定される発達の社会的状況を解明した後、私たちは、それに続いて、その年齢期に固有な新形成物がこの状況における子どもの生活から、いかに必然的に発生し発達するかを解明しなければならない。何よりも子どもの意識の人格の再編を特徴づけるこうした新形成物は、年齢の発達の前提ではなく、その結果ないし所産である。子どもの意識における変化は、その年齢期に固有な一定の形態での子どもの社会的存在様式を基礎にして発生する。そうであるからこそ、新形成物の成熟はその年齢期の始まりではなく終わりに属している。子どもの意識の人格においてひとたび新形成物が発生すると、その新形成物がもたらすのは人格のものが変化することであり、そのことは、その後の発達にとってもっとも本質的な結果とならざるをえないのである。……私たちが見いだしてきたように、年齢の発達の結果として、その年齢期の終わりに発生する新形成物は、子どもの意識の構造の再編をもたらす、そのことによって、外的現実および自分自身への彼の関係のシステム全体を変更する。だがこのことは、その年齢期の始まりまでに基本的特色において形成された発達の社会的状況も必然的に変更されねばならないことを意味するのである。……以前の発達の状況は子どもの発達につれて崩壊し、次の年齢期のための出発的モメントとならねばならぬ新しい状況が、同じように発達につれて、基本的特色において形成される。研究が示すように、発達の社会的状況のそうした再編は危機的年齢期の主要な内容を構成している。(

， ， 1932-34 / 1984 ， ， 259-260 // 2002 , p.30-32)

ここで描かれている「発達の社会的状況」と「中心の心理的新形成物」の関係は、明らかに、心理間機能の心理内機能への内化、外部から内部への移行には収まりえない。上記の引用から、筆者の解釈を加えながら、いくつかのモメントを取り出しておこう。

（1）ある相対的に安定した年齢期に固有な「発達の社会的状況」はその年齢期の第1段階では子どものなかに中心の心理的新形成物の萌芽の形態を産み出す。これは心理間機能から心理内機能への内化とパラレルに捉えられる点である。

（2）この中心の新形成物の萌芽の形態はその年齢期の第1段階から第2段階にかけて「成熟」するなかで、中心の新形成物を軸とした子どもの意識全体の再編が生じる。これはおそらく自然（発生）的な構造化であろう。

（3）子どもの新しい意識システム、つまり再編された人格はそれまでの「発達の社会的状況」と矛盾するようになり、その社会的状況は崩壊を迎える。つまり危機的年齢期が始まるのである。これは子どもによる、または子どもに促された大人による「発達の社会的状況」の变革であり、新しい社会的状況の出現である。それは明らかに、子どもにとって外部から内部への移行ではなく、内部から外部への移行、すなわち外化と特徴づけられるであろう。

こうして、《内化 - 意識構造の自然（発生）的再編 - 外化》という図式が得られる。ここでも、心理間機能の心理内機能への内化との《断絶と継続》の関係が認められるのである。

第3は、30年代ヴィゴツキー理論の新しいもののひとつである心身問題を踏まえるならば、「自然的発達」と「文化的発達」の関係はどう捉えられるべきかという問題である。

まず、A・N・レオンチェフがこの関係をどう捉えたのかについて吟味しておこう。彼は発達の分析において自然的発達と文化的発達を対置して捉えるという問題設定そのものとこの用語法に否定的である。レオンチェフの言うところによれば、ヴィゴツキーは労働にかんするマルクスの分析や、「裸の手と知性それ自体はたいして値打ちがない。すべては道具と補助手段の助けによって実現される」というベーコンの言葉に学びながら、「裸の手」と「道具をもった手」が違いうように、それ自体としての理性と道具・補助手段をもった理性を区別して、心理機能の水準を二つに区分している。レオンチェフはこれに続けて、次のように述べている。

心理現象の領域では、第1の水準をヴィゴツキーは「自然的」心理過程と呼び、第2の水準を「文化的」心理過程と呼んだ。「文化的」過程とは、独特な心理的道具と補助手段によって媒介された「自然的」過程である。ヴィゴツキーによって提起された労働過程と心理過程のアナロジーは十分に近似的であると指摘するのは困難ではない。マルクス主義の創立者たちが示したように、人間的な手は器官でもあり労働の所産でもある。したがって、「裸の手」と道具をもった手の対置は、かくも鋭い形では正当化されない。「自然的」心理過程と「文化的」心理過程の鋭い対置もまた不当である。ヴィゴツキーの選択した用語法は、誤解をもたらした。なぜなら、はたして現代人のあらゆる心理過程は文化的過程ではないのだろうか、という疑問が生じたからである。ヴィゴツキーの思想のこうした弱さは、彼の存命中にも死後にも、正当な批判をよび起したのだった。（ , . . , 1982 , . 20）

レオンチェフは「自然的」「文化的」の用語ではなく、心理機能・過程の低次の形態と高次の形態という用語を使い、低次の形態が高次の形態の前提となるという面のみを認めている。しかし、筆者にとっては、上記の指摘は理解に苦しむものである。アナロジーはあくまでもアナロジーなのであり、「人間的な手」の解釈のみを取り上げて、その解釈を心理過程に適用することや、「誤解」を理由に用語法を誤りとし、さらにその程度の理由で、思想の弱さを指摘するというのは、論理的ではない。新しい理論は他者の誤解や批判を伴うことなしに生まれた例はないからである。

筆者には、発達過程を自然的発達と文化的発達の二つの過程に分析することには、今もなおいくつかの意義があるように思われる。

(1) あえて「自然的」なる用語を使用する積極的意味のひとつは、西洋思想史において種々の哲学者たちが提起した「自然」概念を対置して、ヴィゴツキー理論の特質を明らかにしうる点にもある。

(2) 自然的発達と文化的発達の相互関係という視点は、個別的心理機能にかんして今なお有効である。たとえば、イリエンコフの想像力にかんする哲学的分析のひとつのキー概念は「自然発生的想像」と「文化的想像」の問題であり、想像が思考能力とならば人間の「普遍的能力」であるためには、「文化的想像」と区別される「自然発生的想像」の概念が不可欠であり、それによって想像の普遍性が説明され、「文化的想像」への発達が分析されている(, , . , 1960 / 1984 , 1964 / 1984)。このように自然的発達または自然発生的発達の概念は想像のようなかなり高度な個別機能にとっても有効である。

(3) 人間の発達を障害をもつ子ども・大人を含んで統一的に把握するとき、したがって、発達を真に理解しようとするとき、自然的発達の概念は不可欠なモメントとなる。ヴィゴツキーは「高次心理機能の発達史」のなかで系統発生と個体発生を、したがって人類史と個人史を比較しながら、その両者には「2つの発達路線」、つまり「行動の生物学的と歴史的発達、自然的発達と文化的発達」という2つの路線が存在することを指摘し、しかも人類史と個人史において2つの発達路線のあり方は「アナログ」であるが「パラレル」ではない、と述べる(, , . , 1931 / 1983 , . 30-31 // 1972 , p.44-45)。すなわち、2つの発達路線は系統発生においては順次的にあらわれるが(ホモ・サピエンスの登場までの生物学的進化から、道具や言語などの人工物による環境適応としての原始人から文化的人間への歴史的発達へ)、個体発生においては、「2つの過程は融合した形で現れ、……真の統一的過程を形成する」のである(, , . , 1931 / 1983 , . 31 // 1972 , p.45)。いいかえれば、「人間の生物学的発達において支配するのは活動性の身体的システムであり、歴史的発達において支配するのは活動性の道具的システムであり、したがって、系統発生において2つのシステムが離れてあらわれ、それらが個々別々に発達するのに対して、個体発生においては、……2つのシステムは同時に一緒に発達する」(, , . , 1931 / 1983 , . 33 // 1972 , p.48-49) のであり、「子どもの活動性のシステムはその当該の状況において、

彼の身体的発達と道具の獲得の程度とによって規定」され、「2つの異なるシステムは一緒に発達しながら、本質的には、第3の、独特な種類の新しい発達を形成する」のである（（ ），（ ），1931 / 1983，（ ），34 // 1972，p.49）。こうして人間の個人史は「自然」と「文化」の統一として、2つの発達路線の交差と融合として描かれることになる。したがって、個人の発達は人類史におけるような自然的発達から文化的発達への移行ではないし、レオンチェフが言うような心理機能の低次形態が高次形態の前提となるだけではない。

ヴィゴツキーの発達論のなかに自然的なものと文化的なものの二重性と統一性のモメントを見いだしてこそ、論理的記憶、随意的注意、言語的思考の分析につづいて、30年代に研究された生活的行為と遊び的行為、教授・学習における自然発生性と反応性、生活的概念と科学的概念、母語と外国語、低次の情動と高次の情動、現在の発達水準と可能的発達水準からなる発達の最近接領域などの一連の2つの概念の対置と関連づけを理解することができる。それぞれの前者は後者の前提になるだけではない。両者の関係はもっと複雑であり、むしろ後者による前者の改造こそ発達の名に相応しいものである。

ヴィゴツキーは2つの過程の関係の複雑さを解明する鍵を障害を持つ子どもの発達のなかに見だし、そこに自然的発達と文化的発達の関係の独特な現れ方を見いだしている。

逆説的に見えるかもしれないが、高次心理機能の発達を理解する鍵を、いわゆる障害をもった、つまり生物学的な不完全さをもった子どもの発達の歴史のなかに見いだしたいと思う。この逆説の説明は、なんらかの身体的障害によって重荷を背負うことになった子どもの高次形態の行動の発達の性格そのもののなかにある。（（ ），（ ），1931 / 1983，（ ），36 // 1972，p.52）

.....障害を持つ子どもの心理発達の基本的特色となるのは、障害を持たぬ子どもには特徴的である融合した2つの発達の側面の分化、不一致、くいちがいである。2つの系列は一致せずに、分岐し、融合したひとつの過程を形成しない。ひとつの系列における欠落と脱落は他の系列のなかに、別の箇所での別の欠落をよび起こすのである。（（ ），（ ），1931 / 1983，（ ），39 // 1972，p.56）

こうした分析から、障害を持たぬ子どもの場合に外面的にはたんなる文化的発達と見えるものの背後には自然的発達が隠されており、それ故に、子どもの発達は2つの発達の融合と捉えるべきこと、したがって、自然的発達は消滅するのではなく、「第3の発達」のなかに合流し、姿を変えて継続していることが含意されるのである。

（4）発達を二重性と統一性において捉える発達論がさらにウィングを拓けるならば、それはより広範な問題に、人間の二重の本性 身体と精神の二重性と統一性に進んでいくと捉えることは合理的であろう。その意味では、「情動にかんする学説」は書かれるべきして書かれた手稿であり、自然的発達と文化的発達の概念、ないし人間の二重の本性という概念を放棄すれば、ヴィゴツキーがこの未完の手稿をなぜ書いたかは理解できないであろう。

生理学的には視床下部に局在化される低次の情動と大脳皮質によってそれが制御された高次

の情動は、2つの発達路線、発達の二重性と統一性を捉える最良の素材のひとつである。そこでは低次の情動が高次の情動の前提となるだけではないことは明白である。身に危険が及ぶときに低次の情動がよび起こされ、それが闘争か逃走にむけて身体を準備することは、高次の情動が高度に発達した芸術的な人物にあっても起こりうることである。情動の領域では、いかに高次の情動が豊かな人物でも低次の情動、いわば自然的情動はそのままの形で発現する。したがって、情動は2つの発達路線の関係の複雑さを明示し、自然的発達の意味を照明するのである。

以上の(3)、(4)を考察してみると、「子どもの文化的発達の問題」や「高次心理機能の発達史」などにおけるヴィゴツキー理論は、「文化 - 歴史理論」と呼ぶよりは、人間発達の二重性と統一性をよりよく表す「自然 - 文化理論」、あるいは「二重発達融合理論」や「第3発達理論」と名づける方が相応しいであろう。これは筆者の第2の作業仮説である⁽¹⁾。

5. ヴィゴツキーの「文化 - 歴史理論」を30年代における彼の新しい理論展開の視点から捉えなおしてきた。このことはそのまま、ヴィゴツキー理論の発展をいくつかの時期に区分することでもある。そうした時期区分を発展の最後の環から捉えた場合、次のような仮説的図式が得られるであろう。

A 「心理・意識・無意識」(1930年)から「情動にかんする学説」(1931～33年)における心身過程を視野にいれた「人間の心理学」の構築にむけた時期。

B 「人間の具体的心理学」(1929年)、「心理学的システムについて」(1930年)から「思考と言語」(1934年)、「知的遅滞の問題」(1935年)における「意識の構造化」の時期。

C 「子どもの文化的発達の問題」(1928年)から「思考と言語」(1934年)における「文化 - 歴史理論」(「自然 - 文化理論」等)の時期。

CとB・Aは《断絶と延長》として捉えられ、AとBはほぼ同時に進行しているが、BからAへは《延長》の関係として捉えられるので、両者を区別しておきたい。

これ以前の時期は小論では分析していないが、心理学研究の始まりからCまでの時期と、さらにそれ以前の文学研究の時期は当然区別されねばならない。したがって、上記の図式に次の時期がつけ加えられる

D 反射学批判(1924年)から「心理学の危機の歴史的意味」(1927年)における心理学の方法論を構築しようとした時期。

E ハムレット論(1915～16年)から「芸術心理学」(1925年)における文学および芸術心理学の研究の時期。

E・DがC以降の土台になっているとのエリコニンの分析（ , , 1983 / 1989）もあるが、小論では取り上げていないので、この関係の分析については別の機会に譲ることしたい。

以上の5つの時期区分が筆者の第3の作業仮説である。

エピグラフに掲げたギタ・ヴィゴツカヤの言葉にあるように、わが国では、いま準備されているものを含めればEからAに至るすべての時期の主な著作の翻訳が出揃うことになる。その多くは心理学者よりも教育学者によって翻訳されてきた。それは原語による読解を重要視してきた教育学の良き伝統のなせる業であろう。だが教育学はやはりヴィゴツキー理論を教育学的に捉える傾向から自由ではない。これは筆者の自戒の言葉でもある。問題は、その傾向を乗り越えて、ヴィゴツキー理論の全体像を発展的かつ精密に分析することである。

〔注〕

- （1）ルネ・ヴァン・デル・ヴェールは、ヴィゴツキーの「情動にかんする学説」におけるスピノザとヴィゴツキー理論の関係について、他の研究者から引用する形で、次のような2つの疑問を呈している。

Yet one doubts whether a developmental theory of emotions can benefit from the study of Spinoza's writings, for a developmental perspective seems to be entirely lacking in his work (Calhoun and Solomon, 1984) and Spinoza's writings have a reductionist flavor (Harre, 1986, p.3). One can also question the value of Vygotsky's solution for the general ontological problem of body and mind. Is his hierarchical theory of mind, in which the lower psychological processes are "superseded" by higher, really relevant to the ontological problem of mind-body dualism? Is not some form of dualism retained in the distinction between lower and higher psychological processes? These questions remain unanswered. (Van der Veer, Rene & Valsiner, Jaan, 1991, p. 359)

ヴァン・デル・ヴェールが提起する第1の疑問は、「発達のパースペクティブ」が全体として欠如し「演繹的趣き」をもったスピノザの著作の研究から、情動発達理論は利益を得られるのであろうか、というものである。この点について、ヴィゴツキーのスピノザ理解の深さを感じさせる次のような明示的回答がある。

スピノザ理論の基礎となるのは次のものである。彼は決定論者であり、ストア派とは違って、人間は感情への支配力をもっており、理性は情念の秩序や連関を変更し、それらを理性において与えられた秩序や連関と照応したものにしうる、と主張した。スピノザは正しい発生的関係を表現したのである。個体発生的発達の過程における人間的情動は、人格の自己意識の面でも、現実への意識の面でも、一般的構えとの連関のなかに入り込む。他者に対する私の軽蔑は、その人の評価や理解との連関のなかに入り込む。この総合こそ、そのなかで私たちの生活が経過するところのものである。感情または情動の歴史的発達は主要には、感情または情動が与えられていた原初的連関が変更され、新しい秩序と連関が発生する、という点にある。(, , 1930 / 1982, . 125)

以上のように、スピノザの規定する感情と理性の関係のなかに、ヴィゴツキーは「正しい発生的関係」を見いだしている。まさしくスピノザの「演繹的趣き」のなかに、ヴィゴツキーは発達理論に有益なものを読みとったのである。

第2の疑問は、「低次心理過程が高次心理過程に『取り替え』られる」ヴィゴツキーの「階層的理論」は「心身二元論の存在論的問題」に関連しているのではないかと、「低次心理機能と高次心理機能のあいだの区別」のなかには「ある種の二元論」が保持されていないのだろうか、というものである。この問題でのヴィゴツキーの立場については、すでに4の後半において「自然的発達」と「文化的発達」の相互関係にかかわって述べておいた。ここでの問題はそれが心身二元論あるいは「ある種の二元論」に属するものであるかどうかである。

しかし、筆者にはヴァン・デル・ヴェールの問題設定そのものが誤りを含んでいると思われる。心身二元論は、身体と精神が、異なる原理によって デカルトの場合には一方は力学法則にもとづいて、他方は絶対的自由意志にもとづいて 運動するという、それぞれ異なる存在様式をもつことを前提としている。デカルトの場合には、心身の交わりを問題にせざるをえない情念の分析において、この二元論は破綻したのである。前述のように、ひとつの心身過程をその視点によって「心理学的過程」あるいは「生理学的過程」と捉えるとき、ヴィゴツキーはスピノザ的であり、心身一元論的である。ひとつの心理過程を「低次」と「高次」の過程に区別することそのものが直ちに二元論的であるとは言えない。それは、人間というひとつの存在のなかに「身体」と「精神」を見出すことそのものが直ちに二元論とは言えないのと同じことだからである。

〔引用文献〕

- 神谷栄司 (1983 / 1989), 『ヴィゴツキーの発達理論』, 1983 / 1989 .
- 神谷栄司 (1960 / 1984), 『ヴィゴツキーの発達理論』, 1960 / 1984 .
- 神谷栄司 (1964 / 1984), 『ヴィゴツキーの発達理論』, 1964 / 1984 .
- 神谷栄司 (1990 // 2003), 『ヴィゴツキーの発達理論』, 1990 // 2003 .
- 神谷栄司 (2004a), 『ヴィゴツキーの情動論と「人間の心理学」』, 『ヴィゴツキー学』第5巻, 2004 .
- 神谷栄司 (2004b), 『ヴィゴツキーの発達理論をめぐって』, 『障害者問題研究』第23巻第1号, 2004 .
- 神谷栄司 (2004c), 『幼児の想像発達における精神的なものと身体的なもの () 身ぶり表現の哲学的・心理学的分析』, 『佛教大学社会学部論集』第39号, 2004 .
- チェフ, A・A, 『ヴィゴツキーの生涯』, 菅田洋一郎・広瀬信雄訳, 新読書社, 2003 .
- 中村和夫 (1998), 『ヴィゴツキーの発達理論 文化 - 歴史的理論の形成と展開』, 東京大学出版会, 1998 .
- スピノザ (1677), 『エチカ』, 畠中尚志訳, 岩波文庫 (上・下), 1951 .
- Van der Veer, René & Valsiner, Jaan (1991), 『Understanding Vygotsky』, Blackwell, 1991 .
- ヴィゴツキー (1927 / 1982 // 1987), 『ヴィゴツキーの発達理論』, 1927 / 1982 // 1987 .

, 1927 / : . . , . 1 , . , 1982 . // ヴィゴツキー, 心理学の危機, 柴田義松他訳, 明治図書, 1987 年所収.

, . (1928 / 2003), , 1928 / :

2003 . , . (1929 / 2003), , 1929 / :

, . . , . , 2003 . , . (1930 / 1982 // 1987), , 1930 / :

1982 . // ヴィゴツキー, 心理学の危機, 柴田義松他訳, 明治図書, 1987 年所収.

, . (1930 / 1982), , 1930 / :

, . . , . 1 , . , 1982 . , . (1930b / 1982), , , 1930 / :

: , . . , . 1 , . , 1982 . , . (1930 / 1984 // 2002), , 1930 / :

: , . . , . 6 , . , 1984 . // ヴィゴツキー, 新・児童心理学講義, 柴田義松他訳, 新読書社, 2002 年所収。ただし邦訳には一部省略がある.

, . . , . (1930 / 1993 // 1987), , 1930 / , . . , . . , . , 1993 // ヴィゴツキー, ルリヤ, 人間行動の発達過程 猿・原始人・子ども, 大井清吉他訳, 明治図書, 1987.

, . (1931 / 1983 // 1972), , 1931 / :

, . , 1983 . // ヴィゴツキー, 精神発達の理論, 柴田義松訳, 明治図書, 1972 年。ただし全 15 章のうち 1 ~ 5 章が訳されている。なお現在, 柴田義松, 土井捷三によって 6 ~ 15 章の翻訳・出版が準備されている.

, . (1931-33 / 1984), , 1931-33 / :

. . , . 6 , . , 1984 . なお, 邦訳は全 20 章中, 1 ~ 10 章は「ヴィゴツキー学」第 4 巻 (2003 年), 11 ~ 14 章は「ヴィゴツキー学」第 5 巻 (2004 年) に土井捷三や筆者らによって翻訳・掲載されている。また現在, 全 20 章の翻訳・刊行が同訳者らによって準備されている.

, . (1932-34 / 1984 // 2002), , 1932-34 / :

, . . , . 4 , . , 1984 . // ヴィゴツキー, 新・児童心理学講義, 柴田義松他訳, 新読書社, 2002 年所収.

, . (1934 / 1982 // 1962 , 2001), , 1934 / :

, . . , . 2 , . , 1982 . // ヴィゴツキー, 思考と言語, 柴田義松訳, 明治図書, 1962 年。ヴィゴツキー, 思考と言語, 柴田義松訳, 新読書社, 2001.

, . (1935 / 1983 // 1982), , 1935 / :

: , . . , . 5 , . , 1983 .

ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について () (神谷栄司)

// ヴィゴツキー障害児発達論集, 大井清吉他訳, ぶどう社, 1982.

, . (1984), 《 . . .

》, . 6 , . , , 1984 .

Yaroshevsky , Mikhail (1989) , *Lev Vygotsky* , M . , Progress Publisher , 1989.

(かみや えいじ 社会福祉学科)

2004 年 10 月 15 日受理